

病害虫発生予察情報（4月予報）

平成30年3月23日
静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (県平均平年値)	予報の根拠
イチゴ	うどんこ病	発生量：多	3月中旬発生量：多（+） 気象予報：気温：高い（+）
	灰色かび病	発生量：多	3月中旬発生量：多（+） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：少ない（-）
	炭疽病	発生量：やや少	3月中旬発生量：少（-） 気象予報：気温：高い（+）
	アブラムシ類	発生量：多	3月中旬発生量：やや多（+） 気象予報：気温：高い（+）
	ハダニ類	発生量：やや多	3月中旬発生量：並（±） 気象予報：気温：高い（+）
	アザミウマ類	発生量：並	3月中旬発生量：少（-） 気象予報：気温：高い（+）
トマト	灰色かび病	発生量：やや多	3月中旬発生量：やや多（+） 気象予報：気温：高い（±） 降水量：少ない（-）
	葉かび病 すすかび病	発生量：少	3月中旬発生量：少（発生なし）（-） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：少ない（-）
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：並 タバココナジラミ発生量：やや多	3月中旬発生量：黄化葉巻病：やや少（-） コナジラミ類：並（±） 気象予報：気温：高い（+）
	ハモグリバエ類	発生量：少	3月中旬発生量：少（発生なし）（-） 気象予報：気温：高い（+）
チャ	カンザワハダニ	発生量：やや少 (摘採面寄生葉率2.4%)	3月上旬発生量：少（-） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：少ない（+）
ウンシュウミカン	そうか病	発生量：やや多	3月上旬発生量：多（+） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：少ない（-）
	ミカンハダニ	発生量：並 (寄生葉率3.6%)	3月上旬発生量：少（-） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：少ない（+）
カンキツ	かいよう病	発生量：並 (中晩柑 発病度(葉)0.8)	3月上旬発生量：並（±） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：少ない（-）
果樹全般	カメムシ類	発生量：多	越冬虫量：多（+）

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県過去の10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県過去の10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

2 予報の根拠と防除対策

【イチゴ】

<生育の概況>

3月中旬の巡回調査では、平年並の生育状況であった。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、平均発病株率は2.3%（平年1.0%）、発生面積率は34.5%（平年16.4%）で、平年より多い発生であった。
- ・本病は気温が20℃前後のときに発生しやすい。1か月予報では、気温は平年よりも高く、ハウス内の気温は本病の発生に適する。

防除対策

- ・株の過繁茂は本病の発生を助長させるため、不要な下葉、果梗枝は除去する。
- ・現在発病が少しでもみられるほ場では、早急に防除を行う。
- ・発病した果実は速やかに取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、平均発病株率は10.6%（平年1.5%）で、発生面積率は82.8%（平年19.1%）で平年より多い発生であった。
- ・本病は気温が20℃前後で、多湿条件のときに発生しやすい。1か月予報では、気温は平年よりも高く、ハウス内の気温は本病の発生に適する。

防除対策

- ・株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、施設内の除湿に努める（不要な下葉を除去する、日中の換気を早めに行う、かん水量を必要最少限にするなど）。
- ・発病した果実や茎葉（図1）は伝染源となるため速やかに取り除くとともに、枯葉、老化葉、不要な果梗枝も取り除き、ほ場外で埋没処分する。
- ・予防的な薬剤防除に努める。曇雨天が続く場合はハウス内湿度が上がるのを防ぐため、くん煙剤を利用する。表1に「静岡県農薬安全使用指針・農作物病虫害防除基準」に掲載されているイチゴ灰色かび病の防除薬剤を抜粋した。薬剤の使用に当たっては、薬剤感受性の低下を避けるため、作用機構が同じ薬剤の連用を控え、異なるFRACコードの薬剤をローテーションして使用する。

表1 県病害虫防除基準に掲載されているイチゴ灰色かび病の防除薬剤

商品名	使用方法	希釈倍数・使用量	時期	回数	FRACコード*
アフエットフロアブル	散布	2000倍	収穫前日まで	3回以内	7
アミスター20フロアブル	散布	1500倍	収穫前日まで	苗床:4回以内、 本圃:3回以内	11
カンタスドライフロアブル	散布	1000~1500倍	収穫前日まで	3回以内	7
ジャストミート顆粒水和剤	散布	2000~3000倍	収穫前日まで	3回以内	12、17
スミレックス水和剤	散布	2000倍	収穫前日まで	3回以内	2
セイビアーフロアブル20	散布	1000~1500倍	収穫前日まで	3回以内	12
ファンタジスタ顆粒水和剤	散布	2000~3000倍	収穫前日まで	3回以内	11
フルピカフロアブル	散布	2000~3000倍	収穫前日まで	3回以内	9
ポリオキシナL水溶剤	散布	5000倍	収穫開始14日前 まで	3回以内	19
スミレックスくん煙顆粒	くん煙	くん煙室容積100立方 メートル(床面積50平 方メートル×高さ2m) あたり6g	収穫前日まで	3回以内	2
フルピカくん煙剤	くん煙	くん煙室容積500立方 メートル(床面積250 平方メートル×高さ 2m)あたり50g(1錠)	収穫前日まで	3回以内	9
ロブラールくん煙剤	くん煙	くん煙室容積300~400 立方メートル(高さ 2m、床面積150~200平 方メートル)あたり 100g(50g×2個)	収穫前日まで	4回以内	2

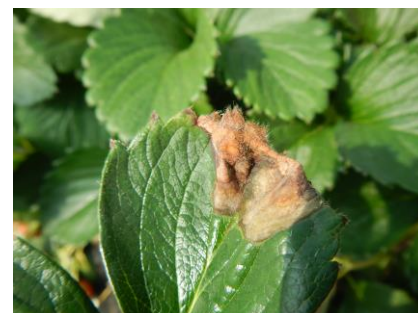


図1 発病した葉

●炭疽病

予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、平均発病株率0.4%（平年0.7%）で平年より少ない発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・発病が見られたハウスでは、温度管理に注意し、日中高温（25℃以上）にならないようにする。発病株は根から抜き取り、ビニール袋などに入れてほ場外へ持ち出し処分する。
- ・発病が見られたほ場の株は潜伏感染している恐れがあるので、健全に見えても親株にしない。また、発病が見られたハウスでは夏に土壤消毒を徹底する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では平均寄生株率は1.9%（平年1.5%）と平年に比べやや多い発生であった。
- ・1か月予報では気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・アブラムシ類の発生に注意し初期防除に努める。すでにアブラムシ類が発生しているほ場では早急に防除する。
- ・天敵を利用している場合は、アブラムシ類のマミーの発生状況をよく観察する。
- ・アブラムシ類が多発した場合は天敵（チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ、アブラバチ）に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では平均寄生株率17.0%（平年14.8%）と平年並の発生であった。ハダニ類の発生は地域や圃場により大きく異なり、多発生ほ場もみられた。
- ・1か月予報では気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ハダニ類の寄生が認められた場合は少発生うちに防除する。なお、ハダニの発生している株が点在している場合は発生株周辺にスポット散布するなど、迅速に対応する（農薬の総使用回数に注意する）。
- ・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、物理的に作用する剤や天敵を利用する。また、物理的防除剤は卵への効果が低く残効性が期待できないため、5日間隔前後で連続散布する。
- ・天敵を利用している場合はハダニ類、天敵の発生状況をよく観察し、天敵の追加放飼または薬剤散布をする。
- ・薬剤散布をする時は天敵（チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ、アブラバチ）に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

●アザミウマ類

予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では平均寄生株6.1%（平年9.3%）と平年に比べ少ない発生であった。
- ・1か月予報では気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・アザミウマ類は花での発生をよく観察し、必要のない花は摘み取る。
- ・例年多発するほ場では開花初期に集中的に防除を行う。
- ・ハダニ類とアブラムシ類の天敵を利用している場合は天敵（チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ、アブラバチ）に影響のない薬剤を選択し散布する。
- ・4月以降気温が高くなるとハウスを開けることで飛び込みが増えるため、注意する。

【トマト】

<生育の概況>

生育は平年並の状況である。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は7.9%（平年6.2%）と平年よりやや多い発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、特には助長しない。
- ・1月から多発傾向が続いているため、4月も引き続き注意が必要である。

防除対策

- ・株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、施設内の除湿に努める（不要な下葉を除去する、日中の換気を早めに行う、かん水量を必要最低限にするなど）。
- ・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・発病した果実や茎葉は伝染源となるため、速やかに取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。
- ・朝夕の急激な冷えこみによる結露は、本病の発生を著しく助長する。そのため、暖房機利用や循環扇による通風などにより植物体への結露を防止し、施設内の湿度低下に努める。

●葉かび病、すすかび病

予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率12.3%）。
- ・本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度と比較的高温を好み、多湿条件下で発生が多くなる。本県では、12月以降は葉かび病が優先する傾向がある。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より少ないため、発生をあまり助長しない。

防除対策

- ・本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が悪いため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・多湿にならないように換気につとめ、過度の灌水を避ける。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。

●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、黄化葉巻病の平均発病株率は1.7%（平年2.5%）と平年よりやや少ない発生であった。
- ・コナジラミ類の平均寄生株率は2.6%（平年2.5%）と平年並の発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、媒介虫であるタバココナジラミの増殖を助長する。

防除対策

- ・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中深く埋めるなど適切に処分する。
- ・わき芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・今後、気温が上昇しタバココナジラミの発生に適した条件となる。成虫の新芽や葉裏への寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。
- ・収穫残さは本病の伝染源や媒介虫の発生源となる。そのため、栽培終了後は施設内を蒸しこみ、植物体を完全に枯死させ、黄色粘着板を設置し本虫が誘殺されないことを確認してから施設外へ持ち出す。

●ハモグリバエ類

予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、ハモグリバエ類の発生はみられなかった（平年寄生株率1.4%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、ハモグリバエ類の増殖を助長する。

防除対策

- ・上中位葉に白点（産卵痕や食害痕）や絵描き症状（幼虫によるせん孔）が見られる場合は速やかに薬剤防除を実施する。

【チャ】

<生育の概況>

生育は平年より4～5日早い状況である。

●カンザワハダニ

予報の根拠

- ・3月上中旬の巡回調査では、摘採面での寄生葉率0.3%（平年1.5%）、裾部での寄生葉率0.02%（平年2.8%）で、発生は平年に比べ少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、本種の増殖をやや助長する。

防除対策

- ・摘採面の葉に寄生が見られる茶園では早期に防除を行う。その際、葉裏に薬液が届くように散布する。
- ・凍霜害等を受けた茶園では、被害を受けなかった新芽にハダニが集まり集中加害することがあるので、防霜対策を万全にする。
- ・新芽がハダニの被害を受けた場合は、薬剤の摘採前日数に注意して直ちに防除を行う。

<その他病害虫>

●褐色円星病（緑斑症）

防除対策

- ・3月上中旬の巡回調査では、県平均発病葉率14.5%（平年15.6%）と、平年並であった。
- ・本病は、多発すると一番茶萌芽期から生育期に下葉が落葉し、品質・収量への被害が大きくなる。薬剤による防除適期は夏期以降となるが、被害は一番茶生育期に顕著となるため、この時期に発生状況を確認しておく。

●マダラカサハラハムシ

防除対策

近年、葉を食害される被害が発生した茶園が増加している。これらの茶園では一番茶芽に越冬成虫による被害が発生するおそれがあるため、一番茶生育期に薬剤防除を行う。

【ウンシュウミカン】

<生育の概況>

生育は平年並である。

●そうか病

予報の根拠

- ・3月上旬の巡回調査では、葉での平均発病度は0.10（平年0.02）と平年より多い発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より少ないため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・本病は新梢伸長期の降雨により感染が助長されるので、展葉期に予防散布を行う。
- ・被害のある夏秋梢は伝染源となるため、できるだけ除去する。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・3月上旬の巡回調査では平均寄生葉率は1.5%（平年2.4%）と平年より少ない発生であった。
- ・1か月予報では気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・マシン油乳剤を散布する場合、散布むらや散布直後の降雨で効果が低下するので、晴天の日が2～3日続く時に防除を実施する。

【カンキツ】

●かいよう病

予報の根拠

- ・3月上旬の巡回調査では、中晩柑類の葉の発病度は1.0（平年0.9）と平年並の発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より少ないため、本種の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・夏秋梢の病斑は早急に除去する。
- ・防風垣、防風網の整備等を行い、防風対策に努める。
- ・昨年発病が見られた園地では、発芽前または5月上旬と下旬に銅剤の散布を行う。4月中は新芽に薬害が出ることもあるので散布を控える。

【果樹全般】

●チャバネアオカメムシ（越冬状況）

予報の根拠

- ・今年1、2月に行った越冬量調査におけるチャバネアオカメムシ越冬虫数は2.4頭/m²（平年0.8頭/m²）と平年より多かった。地域ごとの越冬量は東部地域4.6頭（平年0.8頭）、中部地域1.0頭（平年0.6頭）、西部地域2.7頭（平年0.8頭）と平年より多かった。
- ・ツヤアオカメムシも昨年秋季の発生量が多かったため、越冬量は多いと思われる。

防除対策

- ・地域やほ場によっては発生状況が異なる場合があるため、ウメ・ビワではほ場における発生をよく観察し、早期発見・防除に努める。

【イネ】

＜その他病害虫＞

●苗立枯病、いもち病(苗いもち)、ばか苗病、もみ枯細菌病、イネシンガレセンチュウ

防除対策

種子消毒（作業を省かず、以下の点に留意して行う。）

- ・自家採種の種もみは塩水選を必ず行う。
- ・県病害虫防除基準に掲載の種子消毒法の手順を守り実施する。
- ・厚まきは発病を助長するため、適正な種量を守る。

育苗管理

- ・出芽期は30℃以上、緑化期は25℃以上の高温とならないよう温度管理に注意する。
- ・シルバーポリシートによる育苗では高温多湿になりやすいため、換気を行い温湿度管理に注意する。
- ・本県では、MBI-D剤（ウィン、デラウス、アチーブ）に対し、いもち病で耐性菌の発生事例がある。また、他県ではQoI剤（嵐、アミスター、オリブライト、イモチエース、イモチミン、オリザトップ）でも、いもち病で耐性菌の発生事例がある。これら耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する（詳細は県病害虫防除基準の「殺菌剤耐性菌に関する各種資料の掲載について」の項を参照）。

●縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

防除対策

- ・常発地では媒介虫となるヒメトビウンカの防除を徹底する。

●斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ等）

防除対策

- ・主要種のアカスジカスミカメは雑草に産み付けられた卵で越冬し、春に孵化する。孵化直後は、水田周辺のイネ科雑草（スズメノテッポウ、セトガヤ、早生型チガヤ）が寄主植物となることから、4月中に除草すると効果的である。ただし、成虫の行動範囲は最大で半径300m程度と広く、個々の水田周辺を除草するだけでは十分な防除効果が得られない場合もあるため、地域ぐるみで除草することが重要である。

●スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

防除対策

- ・昨年の7～9月に水田内や水路で赤橙色の卵塊が見られた地域では、水田内で越冬している可能性がある。貝を破砕するため、3月までにロータリー耕を実施していない場合は速やかに実施する。ロータリー耕は通常の荒起こしより車速を遅くし、ロータリーの回転を上げて浅く高速で耕すと効果が高い。
- ・周辺水路内に泥が残っていると、その中でも越冬するので、水路から泥を上げて貝を破砕する。なお、スクミリンゴガイには寄生虫（広東住血線虫）が寄生している可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめること。

【コムギ】

<その他病害虫>

●赤かび病

防除対策

- ・ 4月に発生が少なくても、5月に多発することがあるので予防散布に努める。特に出穂期から乳熟期にかけて、気温が高く降雨が続くような場合は注意する。
- ・ 防除適期は開花期前後となるので、一回目の薬剤散布を穂揃期から5日目までに行い、さらにその5～7日後に二回目の薬剤散布を実施する。

3 季節予報

(1) 1か月予報 (東海地方 平成30年3月22日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 3月24日から4月23日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率50%です。3～4週目は、高い確率50%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	20	70
1か月	降水量	40	30	30
1か月	日照時間	20	40	40
1週目	気温	10	10	80
2週目	気温	20	30	50
3～4週目	気温	20	30	50

【予報の対象期間】

- 1か月 : 3月24日(土)～4月23日(月)
1週目 : 3月24日(土)～3月30日(金)
2週目 : 3月31日(土)～4月6日(金)
3～4週目 : 4月7日(土)～4月20日(金)

(2) 3か月予報（東海地方 平成30年3月23日 名古屋地方气象台発表）

【予報期間】 4月から6月

【予想される向こう3か月の天候】

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。この期間の平均気温は、高い確率50%です。

4月 天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は、高い確率50%です。

5月 天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

6月 平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

【気温】

3か月			4月			5月			6月		
低	並	高	低	並	高	低	並	高	低	並	高
20	30	50	20	30	50	20	40	40	30	30	40

【降水量】

3か月			4月			5月			6月		
少	並	多	少	並	多	少	並	多	少	並	多
30	30	40	40	30	30	30	40	30	20	40	40

【参考資料】

	平均気温 (°C)			降水量 (mm)		
	4月	5月	6月	4月	5月	6月
浜松	14.7	18.7	22.0	168	191	241.3
静岡	14.9	18.8	22.0	210	213	292.8
三島	14.4	18.5	21.9	149	161	227.8

*1981年～2010年の平均 *降水量は小数点以下を四捨五入しています。

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い（少ない）」「平年並」「高い（多い）」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分（それぞれ33%）となるように決めてあります。（気候的出現率と呼びます）。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い（少ない）場合は「平年に比べて多い（少ない）」、また平年の日数と同程度に多い（少ない）場合には「平年と同様に多い（少ない）」と表現します。なお、単に多い（少ない）と表現した場合には対象期間の2分の1より多い（少ない）ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html
--